平成最後のご祝儀相場に最北のマグロ漁師も驚愕

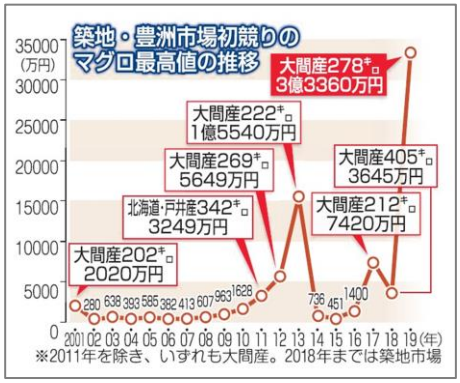
正月５日に東京・豊洲市場で行われた新春初競りで、青森県大間町が再び注目を浴びた。津軽海峡で釣れた278kgのクロマグロに付いた値段は、１本3億3360万円（1kg当たり120万円）という途方もない金額。2013年の大間産が記録した最高値1億5540万円の2倍以上という、平成最後の特大ご祝儀相場が飛び出した。

競り落としたのは、すしチェーン「すしざんまい」を展開する喜代村（東京）。取材に応じた木村清社長は「（平成最後だから）いいマグロを買おうとは思っていたが、ちょっと高すぎたかな」と苦笑いしたという。地元では昨年、漁獲規制の影響で名物の観光イベント「大間マグロ感謝祭」が中止に追い込まれるという出来事もあり、築地から移転して最初の初競りの快挙でハマは驚きに包まれた。

色鮮やかなマグロの赤身のイメージは、新年の茶の間の話題にもピッタリなのだろう。年末年始に流れた全国ネットのテレビでも、厳寒の津軽海峡で初競り向けの大物を狙う特番がいくつかあった。

夜明け前から船を出し、親子や兄弟でひたすらマグロを追い続ける。登場する漁師は皆、無口で愛想もない。たまに語られる下北弁は、標準語のテロップ無しだと理解できない。その映像にドラマ仕立てのコメントが付き、サブちゃんの歌声で「北の漁場」が流れると『白鯨』や『老人と海』にも通じる熱い男たちの物語になるのだ。そうなるとやっぱり、獲物はサケやタラ、アンコウというわけにいかない。何しろ1匹で億のカネを呼び込むのだから。海峡の荒波をものともせず巨体を躍らせるマグロに、本州最北のマグロ漁師の心も躍る。

東奥日報社　広告局デジタル企画部長　畠山温光



〇写真左：過去最高値で競り落とした大間産マグロを前に笑顔を見せる木村社長
〇写真中央：マグロの街・大間ならではの観光イベントとして人気の解体ショー
〇写真右：初競りのマグロ最高値の推移